

誤嚥性肺炎のリスクがある利用者の生活支援 －嚥下体操の実施を通して－

学籍番号 17cc04

学生氏名 大谷紗輝

I. はじめに

介護老人保健施設は、要介護高齢者の自宅復帰を目指すため、医師による医学的管理の下、看護・介護を提供する施設である。A様は入退所を繰り返していたが、同居する長男嫁の体調不良で介護負担の増加のため長期入所希望となった方である。誤嚥性肺炎を発症し入院によりADLが低下しているが、自分のことはしたいという思いを聞き肺炎再発予防のために支援を行った。アセスメントを行う中で、今回学んだことについて事例を踏まえて以下に報告する。

II. 実習先種別・実習期間

実習先種別：介護老人保健施設

実習期間：2018年6月25日～2018年7月27日（23日間）

III. 受け持ち利用者の紹介

氏名：A様 性別：女性 年齢：90代

介護が必要になった主な疾患・障害：誤嚥性肺炎、気管支喘息、糖尿病、慢性心不全
ADLについて

- (1) 移動：車椅子使用
- (2) 食事：自力摂取（食事はやわらか食 Kスプーン使用。水分摂取はとろみ茶と茶ゼリー、ティースプーン使用。左手関節痛があり伸ばすことが難しく右手のみで摂取しているため前傾姿勢になりすすむようにする事がある）
- (3) コミュニケーション：心配りができ協調性がある。難聴で大きな声で話せば右耳のみ聞こえる。視力は良好。

IV. 介護の実際

1. 情報の解釈・関連づけ・統合

とろみ茶や食事をスプーンで自力摂取しているが、啜るときがあり誤嚥のリスクがある。A様は誤嚥性肺炎を繰り返しており再発には注意が必要である。また、嚥下体操がはじまっているのに気づかないことがある。そのため姿勢保持・嚥下機能の低下予防の支援が重要であると考えた。

2. 介護上の課題：体調を崩さないよう誤嚥性肺炎のリスクを軽減する必要がある

3. 介護計画

長期目標：残存機能を活かし、充実した生活ができる

短期目標：嚥下体操を継続することができる

具体的援助内容

- ①食事前の嚥下体操の参加
- ②声かけにて参加を促す。車椅子の向きを変える
- ③施設での体操のない水分摂取の時間の前に個別で嚥下体操を行う
- ④視覚からの情報で理解しやすいよう手順を書いたカードを作成する
- ⑤実施後嚥下状態を観察する

4. 実施及び結果

7/6～7/24日まで継続して実施。

A4サイズの厚紙に嚥下体操の手順をイラストつきで記載し、水分摂取の前にA様に見せながら一緒に動作を行った。計画立案後実習期間中ほぼ毎日実施することができた。視覚からの情報で理解しやすく、カードに興味を持っていただき手順を読み上げながら意欲的に行えた。実施後、急いで飲み込んだりかきこんだりしなければむせることはなかった。お茶を飲む際スプーンを使用せず飲もうとしてむせることがあったため摂取方法の理解を促す必要があると考える。また、食形態に関する発言は聞かれないがおやつが毎日ゼリー状のものであることに対して「饅頭が食べたい」と言ったことがあった。常食の形態は現在食べられないと理解しているが食べたいものの希望もあると知った。

実施者がいなくてもカードを見て行えるかは不明である。A様と「一緒に行く」ことで理解を促し、コミュニケーションも取れるため意欲の向上につながると考える。

V. 考察

今回は機能維持のための嚥下体操に注目し実施を行った。体操やリハビリに意欲的な方で、立案から継続して行えたため目標は達成といえる。誤嚥性肺炎に対して稲川は¹⁾病原菌が呼吸を介して肺や気管に入って炎症を起こす肺炎に対して、食べ物や飲み物を媒介にして起こる肺炎を誤嚥性肺炎と述べている。さらに、誤嚥を起こしやすい人として栄養状態の悪い人、脱水症状がある人、便秘の人と述べており、このことから、体操による食べるための機能維持のほかにも、栄養状態の改善や水分摂取量を増やすといった支援の視点もあったと考えられる。また、口腔内の菌が気管に入り発症する疾患であることから、口腔ケアによる予防も重要であると考ええる。

VI. おわりに

今回の実習を通して、加齢や疾患で利用者の生活が変化していく中で、できる限りその方の能力を維持し活かしていく支援を学んだ。コミュニケーションや計画の実践、利用者のことを深く知ることができ、介護過程の展開を進めることができたことから、利用者理解の重要性を理解した。多くの知識を持つことで様々な視点で考え相手と関わることができる。今後も学びを深め、より良い支援をしていきたい。

引用・参考文献

- 1) 稲川利光 (2013)「介護する人のための誤嚥性肺炎こうすれば防げる！助かる！」主婦の友社